

アイラトビカズラ 特性

マメ科トビカズラ属に分類される常緑つる性植物。巨大な花房をつけるのでよく目立つ。日本の熊本県山鹿市菊鹿町相良地区のアイラトビカズラは樹齢千年とも言われ、国指定特別天然記念物に指定されている。

分類	
界 :	植物界 <u>Plantae</u>
被子植物門	<u>Magno</u>
分類	
界 :	植物界 <u>Plantae</u>
門 :	被子植物門 <u>Magnoliophyta</u>
綱 :	双子葉植物綱 <u>Magnoliopsida</u>
目 :	バラ目 <u>Rosales</u>
科 :	マメ科 <u>Fabaceae</u>
属 :	トビカズラ属 <u>Mucuna</u>
種 :	アイラトビカズラ <i>M. sempervirens</i>
学名	
<i>Mucuna sempervirens</i> Hemsl.	
和名	
アイラトビカズラ(相良飛び葛)、トビカズラ	
<p>liophyta</p> <p>綱 :</p> <p>目 : 双子葉植物綱 <u>Magnoliopsida</u></p> <p>科 : バラ目 <u>Rosales</u></p> <p>属 : マメ科 <u>Fabaceae</u></p> <p>種 : トビカズラ属 <u>Mucuna</u></p> <p>アイラトビカズラ <i>M. sempervirens</i></p>	
学名	
<i>Mucuna sempervirens</i> Hemsl.	
和名	
アイラトビカズラ(相良飛び葛)、トビカズラ	

特徴

つるは黒褐色、葉は楕円形で先が針のようにとがっている。
4月下旬から5月上旬にかけて、芳香のある暗紅紫色の大きな蝶形の花を房状に十数個集まって咲かせる。豆果の長さは60cmに達する。風媒花であり通常の状態では結実しないとされている。

生長においては気温15度以上であれば、1日の生長は5～6cm以上で1ヶ月に1m50cm、4ヶ月6m以上の生長を観測しており日本の気候では年間7m位が限界かと思われ、また弊社の海外圃場フィリピンでは10m以上観測しており中国杭州でも10m以上成長確認しております。

最大の特徴は常緑つる性植物で成長が早い落葉つる性と同じように生長する常緑つる性植物は類をみないように思われます、このような特性を生かし1・2年で経年を待たずして緑地面積の確保ができます。

分布

日本の熊本県山鹿市菊鹿町相良地区のアイラトビカズラは樹齢千年とも言われ、国指定特別天然記念物に指定されている。1962年(昭和37年)に人為交配実験(人工授粉)をしたところ、結実したため、中国中部に分布する常春油麻藤と同じ種類であることが確認された。

中国の長江流域が原産地とされ、日本にも広く分布していたとされるが国内では2カ所を除き絶滅。20世紀末までは熊本県山鹿市菊鹿町相良地区に一本のみ自生しているとされていたが、2000年に長崎県佐世保市の沖にある九十九島の無人島である時計(とこい)島で自生しているのが発見された。2001年に持ち帰った花弁や枝葉などを熊本県山鹿市菊鹿町相良地区のアイラトビカズラと比較して同種とされた。

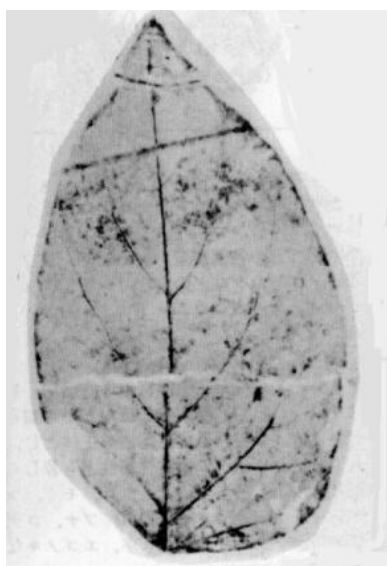
原産地としましては、インドネシア大学大学院・数学・自然科学研究科(修士課程)生物学専攻修了されました、Harry WIRIADINATA(ハリ・ビリアディナタ)理学博士がマレーシア産マメ科トビカズラ属の分類学的研究論文の中で、トビカズラ属は、これまで約190種が知られているとの論文を出されており、この論文の中でも報じられておりますが、上記記載通説では、中国の長江流域が原産地とされるとありますが、調査事実からニューギニアが本属の中心ではないかと書かれております。

国内での生息地はアイラトビカズラの花だよりで確認されております生息分布によりますと、最北端地とし熊本県山鹿市菊鹿町相良地区とされておりますが。

2009年に於いて私が調べた限りではアイラトビカズラの花だよりで確認されている場所として、東京都の新宿御苑の中、その他にも久留米市草野町、神奈川県立相模原公園(神奈川県相模原市麻溝台)、名古屋市立東山植物園には1962年中国原産のものを1982年に中国から導入したもので中国名の「常春油麻藤」があります、京都府立植物園の中庭、兵庫県尼崎市 JR 塚口駅近郊の上坂部西公園、徳島県名西郡石井町にはアイラトビカズラの豆の実が付いておりますこのように日本各地で花だよりが聴けます、ちなみに中国では5年経てば花が咲くようです。

このように花だよりを聞きますと、最北端地としては東京都の新宿御苑の中で、東京都内でも生息可能と推測できます、弊社で所有いたしておりますアイラトビカズラをもう少し北の地に生育出来ないかと思えます。

化石の出土例は同じ種ではないようですが、同じ属の「ウジルカンダ」に似た「ノトビカズラ *Mucuna chaneyi* Ishida」(マメ科) が石川県珠洲市高屋(柳田層){ 新世代中新世中期(2250 万年前)}から出ている。化石は3出羽状複葉の側生小葉で、台湾に現生のウジルカンダに類似とあり、能登半島や壱岐島の中新統中部より産出が知られている。



●日本古生物図鑑(北隆館)より転写

中新世のはじめの頃(約2200万年前)まで、日本列島は大陸の一部で、日本海もほとんど無かった。日本海に海が入り列島となったのはそれ以後である。日本海はそれ以後南側が陸となり、北海道の北で海とつながった大きな湾となり、さらに湖となった。この湾に植物化石が堆積したが、日本の石炭のほとんどはこの時代のものである。

ウジルカンダはこの時代に日本に広く分布していたのであろう。同属のトビカズラもこの時代からのものだと考えられる。菊鹿町のトビカズラは中国から持ち込まれてと言われているが、この個体も佐世保市のものと同じように新世代中新世中期からの生き残りかもしれない。

近縁種

近縁種にウジルカンダ(学名: *Mucuna macrocarpa* Wall.、別名: イルカンダ、カマエカズラなど)があり、大分県や琉球諸島に分布する。

名前の由来

トビカズラの名の由来として、二つのはなしが伝わっている。源平合戦の頃、壇ノ浦の合戦で敗れた平家の残党が相良寺に落ちのびた際に、豊後竹田の源氏方の武将である緒方三郎が寺を焼討をした。焼き討ちの際に寺の観音様は飛翔(ひしょう)してこのカズラに飛び移り危うく難を逃れたという。また、一説には観音様がカズラに姿を変えて飛来され、走落の坂を下る緒方三郎の足にからみつき、落馬したところを残兵が討ち取ったとも伝える。

優曇華

トビカズラは靈華「優曇華」(うどんげ)と呼ばれ「靈華時を隔て開花することあり。開花すれば必ず国家的事変がある」と言い伝えられてきた。事実、1929年(昭和4年)5月に35年ぶりに開花した翌年に満州事変が勃発した。また、仏教の世界では「三千年に一度開花し、その時は金輪王が出現すると、如来が現われる」とも言われている。